

高皿遺跡発掘調査概報

1 9 9 6 ・ 3

三重県埋蔵文化財センター



高皿遺跡 出土石器

例 言

1. 本書は、三重県多気郡多気町四疋田字高皿・池ノ下に所在する高皿（たかざら）遺跡の発掘調査概報である。
2. 本遺跡の名称は、現地調査時においては池ノ下遺跡としていたが、遺物出土の中心が字高皿に集中したため、高皿遺跡と変更した。
3. 本書は、平成7年度農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の第4分冊である。
4. 調査にかかる費用は、その一部を国庫補助を受け三重県教育委員会が、他を三重県農林水産部と地元多気町が負担した。
5. 調査および整理の体制は下記による。

調査主体	三重県教育委員会		
調査担当	三重県埋蔵文化財センター		
	管理指導課	研修員	松葉和也
	調査第一課	技師	日栄智子
		臨時技術補助員	山田康博
整理担当	三重県埋蔵文化財センター 管理指導課		
	足立純子、有川芳子、石橋秀美、井田美奈子、井村浩子、柿原清子、川口 愛、楠 純子、倉田由起子、小林佳代子、須賀幸枝、杉原泰子、武村千春、田中美樹、豊田幸子、富楽幸子、中川章世、中山豊子、西田衣里、西村秋子、浜崎佳代、早川陽子、堀内博子、松本春美、松月浩子、森島公子、柳田敬子、新田智子		
6. 調査にあたっては、三重県農林水産部農地整備課、松阪農林事務所、多気町教育委員会、四疋田土地改良区、地元四疋田・三疋田の方々からの協力を得た。

作業員氏名（敬称略・順不同）	梅村正夫、三谷ちづ子、樋口輝夫、三谷美代子、青木エツ子、吉田明子、奥村さく、田中玲子、木本すみ子、梅村昭子、山口 寛、折戸 利、三谷宗雄、角谷孝夫、木本伊太郎、三谷道生、三谷嘉夫、藪谷 徳、吉田勝行、三谷いさ子、中西つや、竹林淳子、池内幸満、前田 清、池内 靖、尾崎 進、田中耕平、大市勝巳
----------------	---
7. 本書作成にあたっては、江坂輝彌氏（慶応義塾大学）、大塚達朗氏（東京大学）、奥 義次氏（三重県立松阪高等学校）、新田 剛氏（鈴鹿市教育委員会）、久保勝正氏（三重県立上野商業高等学校）、大下 明氏（雲雀丘学園中・高等学校）のご教示を得た。
8. 本書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課および管理指導課が行った。執筆は松葉和也と山田 猛が行い、分担は目次と文末に記した。遺構写真は松葉和也・日栄智子・山田康博が、土器写真は山田 猛と松葉が、石器写真は杉谷政樹と松葉が撮影した。全体の編集は松葉が行った。また、表採遺物は西村廣大君（相可小学校4年生）の提供によるものである。
9. 本書の方位は真北を用いた。なお、磁北方位は、西偏約6度20分（平成元年、国土地理院）である。
10. 本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
11. スキャニングによるデータ取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I 位置と環境……………	(松葉和也) ……	1
II 調査の方法……………	(〃) ……	3
III 層序と遺構……………	(〃) ……	3
IV 遺物……………	(〃) ……	6
1 縄文時代の石器……………	(〃) ……	6
2 縄文時代の土器……………	(山田 猛) ……	11
3 弥生時代以降の遺物……………	(松葉和也) ……	12
V 結語……………	(松葉和也・山田 猛) ……	13

挿 図 目 次

第1図 櫛田川流域周辺の有茎尖頭器・神子柴型石斧出土地……………	1
第2図 高皿遺跡及び周辺の縄文時代草創期遺物出土遺跡位置図……………	1
第3図 遺跡地形図……………	2
第4図 調査区位置図……………	3
第5図 A・B地区平面図……………	4
第6図 石器出土範囲小グリッド割り付け図及び等高線図・土層断面図……………	5
第7図 石器実測図(1)……………	7
第8図 石器実測図(2)……………	8
第9図 縄文土器実測図・拓影……………	10
第10図 弥生時代以降土器実測図……………	13

写 真 目 次

遺跡付近航空写真(南西より)……………	15
A地区調査風景(南より)……………	15
石器写真(1) 石鏃・有茎尖頭器・木葉形尖頭器……………	16
石器写真(2) 木葉形尖頭器……………	16
石器写真(3) スクレイパー……………	17
石器写真(4) 石斧・削器……………	17
縄文土器写真……………	18

表 目 次

第1表 実測図掲載石器一覧表……………	6
第2表 石器一覧表……………	9
第3表 弥生時代以降の遺物観察表……………	12

I 位置と環境

三重と奈良の県境に源流を持つ櫛田川は、三重県のほぼ中央を東流し、伊勢湾に注ぐ全長約87km^①に及ぶ県内有数の河川である。

中流域においては、その流れは大きく蛇行しはじめ、両岸に3段からなる河岸段丘を発達させてきた。

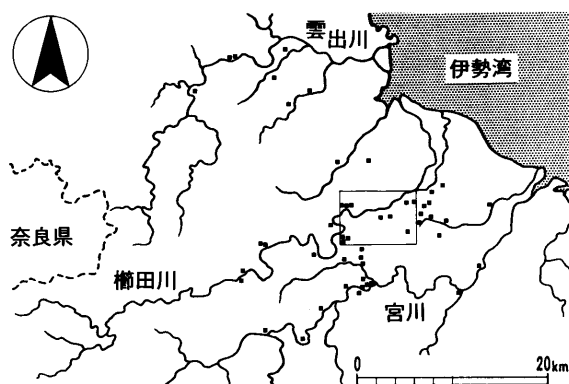
さらに下流域になると両岸に広い平地が広がり、やがて沖積平野を形成して伊勢湾に注いでいる。

高皿遺跡(1)は、この櫛田川の右岸、中流域が終わり、下流域が始まろうとする地域に位置しており、川からは南へ約1km離れている。

本遺跡周囲の地形を見ると、標高200~300mほどの山々から標高20~30m台の平坦地への変換点となっている。本遺跡の南東に西杉根池、南西には天引池がひかえており、それぞれの流路を北方向にのびしている。また、遺跡のある水田面と東西に隣接する水田面との比高は50~80cmほどあり、わずかではあるが二つの小さな谷に挟まれた尾根の先端の微高地

であると言ってよい。

多気郡一带には律令制下の条里制による地名が散見でき、実際に地割の名残を観察できる所もある。本遺跡が所在する大字四正田も、条里制による地名である。天曆七年(953年)の「近長谷寺資財帳」^②の中にも相可郷十六条三正田里・四正田里などあり、この「三」や「四」というのは里の番号である。



第1図 櫛田川流域周辺の有茎尖頭器・神子柴型石斧出土地 (1:800,000)



第2図 高皿遺跡及び周辺の縄文時代草創期遺物出土遺跡位置図 (1:50,000) 国土地理院【松阪】【国東山】【大河内】【横野】 (1:25,000) から

また、本遺跡の東方60mほどのところに「伝・銅鐸出土地」^⑧がある。しかし、その詳細は不明である。

さて、以下では本遺跡が属する縄文時代草創期を中心に、周辺の遺跡を概観することにする。

この時期に特有な石器は、有茎尖頭器や神子柴型石斧などである。それらの、橿田川流域での単独出土をも含めた出土地点の分布をみると、南に並行して流れる宮川とともに、中流域が中心となる。

橿田川流域で、この時期の石器がまとまって出土した例では、多気町牟山遺跡^②がよく知られている。この遺跡は昭和38、39年に調査され、有茎尖頭器・木葉形尖頭器・神子柴型石斧などの石器の他、多量の剝片が出土した。これらの石器群の他に、早期の押型文土器も出土している。

同町坂倉遺跡^④では、竪穴住居4棟以上、炉跡19か所を含む遺構が確認された。その炉跡内から有茎尖頭器が1点出土している。土器は、早期押

型文土器と、押型文以前の草創期末葉に位置づけられる可能性のある表裏縄文や、羽状構成の縄文施文のみのものが出土しており、注目される。

松阪市大原堀遺跡^⑦では有茎尖頭器が、同市上ノ広遺跡^⑧では有茎尖頭器・神子柴型石斧を含む石器群が出土しているが、土器は早期押型文であり、牟山遺跡同様、明確な草創期の土器は出土していない。

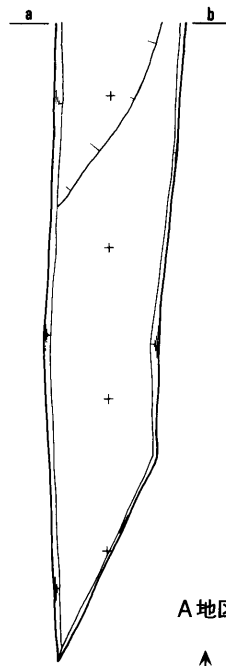
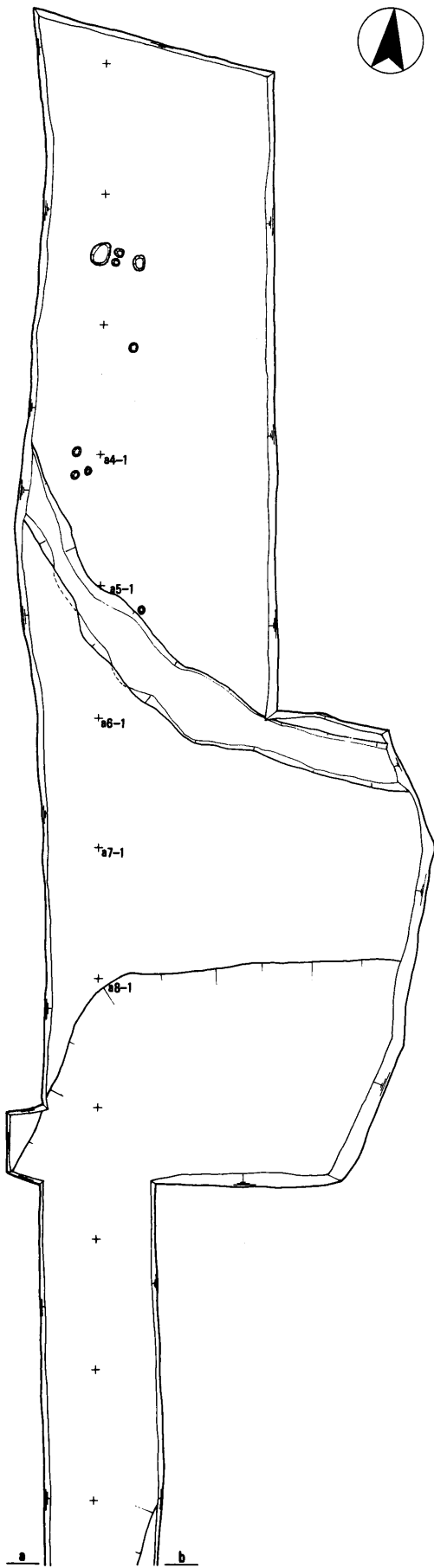
同市王子広遺跡^⑥は、縄文中期から晩期の遺跡であり、後期の掘立柱建物が見つかることで知られるが、遺跡範囲内の土取りにより、有茎尖頭器や神子柴型石斧などが採集された。^⑨

また、多気町上タコリ遺跡(3)、勢和村柳浦遺跡(9)・野々尻遺跡(10)・大曾遺跡(11)では有茎尖頭器が、多気町フケ遺跡(5)では神子柴型石斧が、それぞれ単独出土している。^⑩

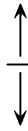
(松葉和也)



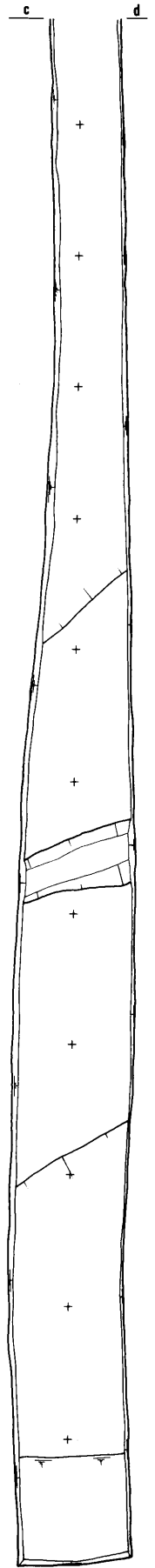
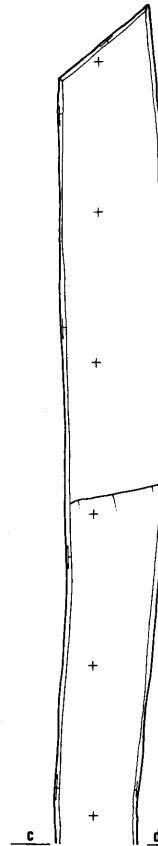
第3図 遺跡地形図(1:5,000) ■は試掘坑



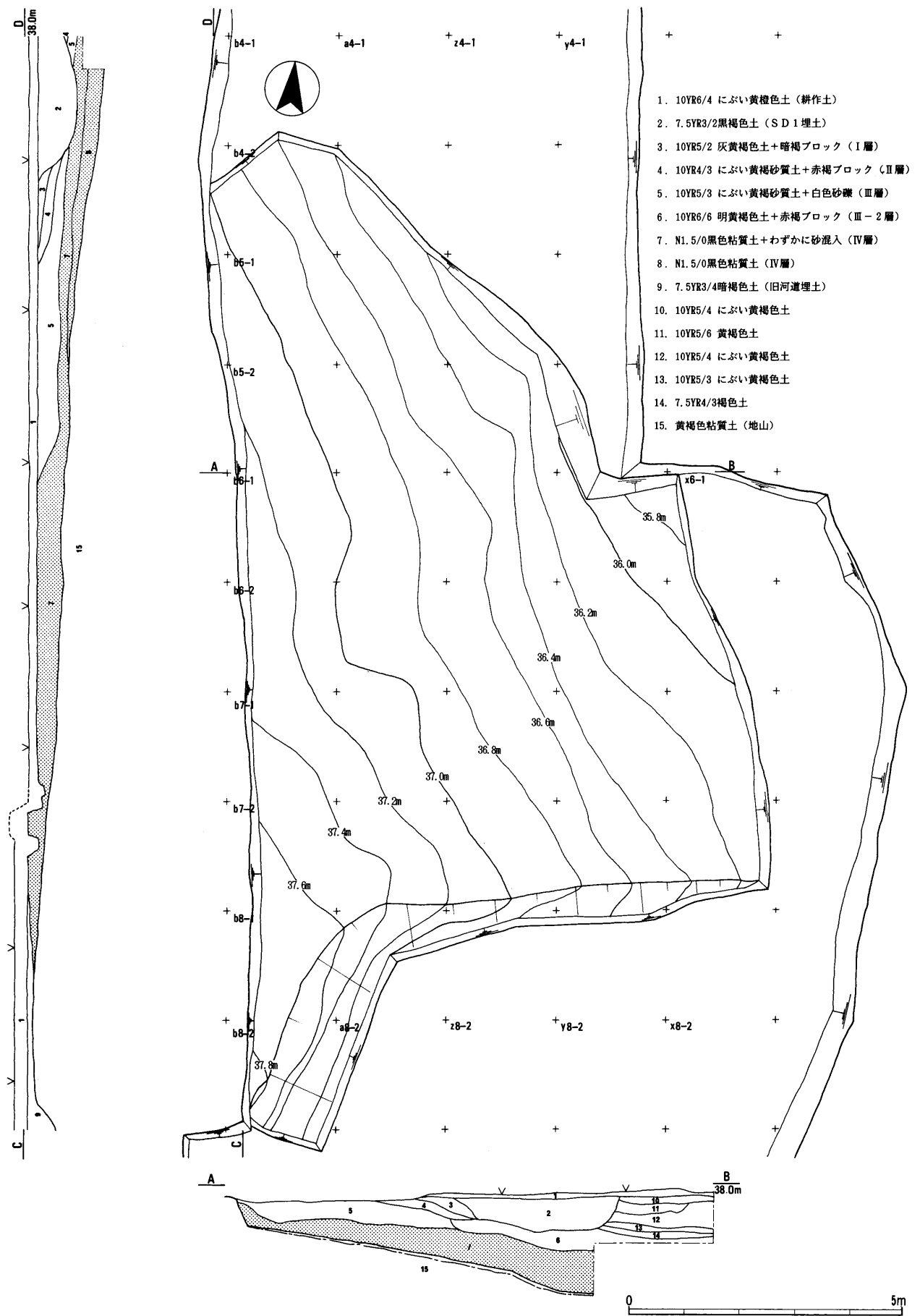
A地区



B地区



第5图A·B地区平面图(1:200)



第6図 石器出土範囲小グリッド割り付け図 及び 等高線図・土層断面図 (1 : 100)

層は含量が少ないものの、縄文時代の遺物が見られ、IV層には縄文時代の遺物が集中する傾向にある。

なお、III層では赤褐色土の小ブロックを含むものをIII-2層、IV層ではやや灰色がかかるものをIV-2層とした。

2 遺構

古墳時代溝 A地区では、溝が一条検出された。出

土土器から、古墳時代前期のものと推定される。最大幅は約2mで、深さは70cmほどである。調査区を北西から南東方向に、I・II・III層を切り込む遺構である。

旧河道 A・B・C各地区で検出したが、深さは確認できなかった。遺物は縄文時代草創期～中世に及ぶ。

(松葉和也)

IV 遺物

本遺跡では、縄文時代初めの石器と土器が出土した。また、弥生時代から古墳時代にかけての土器も出土している。ここでは、縄文時代の遺物に重点を置いて述べることにする。

1 縄文時代の石器

石器・剝片等の出土は、合計2,967点を数える。ここでは、その内の主な器種を取り上げ、代表的なものについて記述する。

A 石鏃(1)

先端部近くで屈曲する五角形の平面形を持ち、わ

ずかに弧状の抉りの入る凹基無茎鏃である。草創期に属する可能性がある。チャート製。

他に、4点のサヌカイト製のものがあるが、いずれも早期以降のものと考えられる。

B 尖頭器(2~14)

2~7は有茎尖頭器、8~14は木葉形尖頭器である。12は頁岩で、他はチャート製である。

2は長30mm、幅20mmと小型で幅広い。先端部は尖らず、側縁が弧状にふくらむ。返しの発達は見られない。完形品である。

3は最大幅15mmで細身の小型品である。丁寧な押

報告 No.	グリッド	整理 No.	層位	(cm) W→E	(cm) N→S	(m) 海拔高	器 種	石 材	(cm) 長	(cm) 幅	(cm) 厚	(g) 重	備 考
1	a6-2	214	IV	113	83	37.34	石鏃	チャート	2.2	1.7	0.4	0.93	
2	y7-1	131	IV	148	68	36.67	有茎尖頭器	チャート	1.8	0.9	0.4	2.40	
3	y6-1	77	IV	196	31	36.10	有茎尖頭器	チャート	4.1	1.6	0.5	2.69	
4	a7-2	165	IV	198	140	37.23	有茎尖頭器	チャート	3.2	2.6	0.7	6.02	上部欠損
5	a5-1	47	IV	142	98	36.95	有茎尖頭器	チャート	4.5	2.9	0.7	8.72	上部欠損
6	b7	—	—	—	—	—	有茎尖頭器	チャート	3.8	2.5	0.6	4.90	
7	b5-2	12	III	116	102	37.46	有茎尖頭器	チャート	5.1	2.3	0.7	6.64	下部欠損
8	b6-1	120	IV	198	18	37.25	尖頭器	チャート	6.3	2.7	1.2	15.02	柳葉形
9	a7-2	50	IV	173	107	37.56	尖頭器	チャート	4.3	2.9	0.6	6.99	下部欠損
10	a7-2	76	IV	70	26	37.39	尖頭器	チャート	3.2	2.2	0.7	3.05	下部欠損
11	a7	—	—	—	—	—	尖頭器	チャート	3.6	2.8	0.6	4.90	下部欠損 トレンチ内
12	b7	—	—	—	—	—	尖頭器	頁岩	4.4	2.6	0.7	4.84	下部欠損
13	a7-1	72	IV	110	190	37.48	尖頭器	チャート	2.8	3.6	0.8	5.43	上部欠損
14	a7	—	—	—	—	—	尖頭器	チャート	3.7	4.5	0.9	18.15	上部欠損 トレンチ内
15	b13	—	—	—	—	—	スクレイパー	サヌカイト	3.6	4.1	0.9	12.13	旧河道内
16	y7-1	69	IV	54	157	36.77	スクレイパー	チャート	3.4	2.7	1.0	6.42	
17	a6-2	145	IV	151	163	37.32	スクレイパー	チャート	4.9	5.1	1.4	33.32	
18	a6-1	264	IV	168	16	36.75	石斧	緑色岩	7.8	2.7	1.5	34.74	
19	b6-1	90	IV	182	170	37.22	石斧	緑色岩	7.8	3.0	1.5	39.15	
20	a6-1	255	IV	167	25	36.93	石斧	緑色岩	7.4	2.4	1.1	23.19	
21	z7-2	62	IV	72	26	37.15	石斧	緑色岩	7.6	3.4	1.5	48.27	
22	z7-2	83	IV	8	144	37.00	石斧	緑色岩	10.4	2.8	2.1	67.73	刃部欠損
23	y7-1	116	IV	108	65	36.59	抉入削器	チャート	3.8	2.7	0.7	4.64	欠損

第1表 実測図掲載石器一覧表

圧剥離が施され、周縁が鋸歯状をなす。発達した逆三角形の基部を持つ。完形品である。

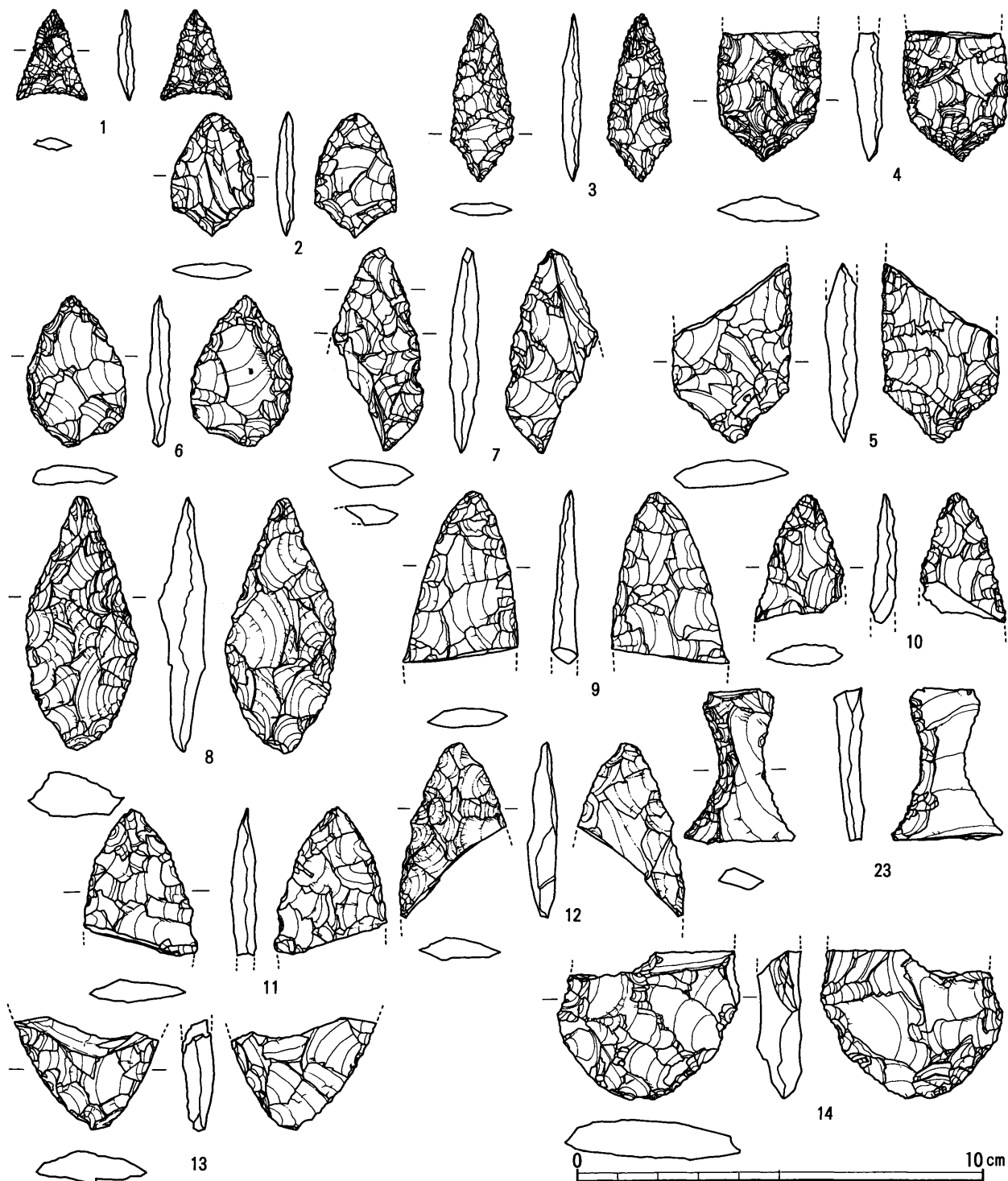
4・5は、本遺跡では大型品に属する例の下部である。いずれも基部の返しは無く、三角形の基部が作られている。

6は基部の突出が不明瞭で、あるいは木葉形に分類すべきかもしれない。側縁部の調整はやや荒く、一部に一次剥離面を残す。

7は完成品である。右下半を欠損するが、有茎尖頭器と思われる。

8は柳葉形のものである。整った平面形を持つが、先端をわずかに欠損する。

9～12は上部が残存する。9は両面に丁寧な押圧剥離が見られる。石材には縞状の節理が目立つ。10は部分的に細かい側縁の調整が見られるのに対し、11はやや幅広の調整である。12の図裏面では一次剥



第7図 石器実測図(1) (2:3)

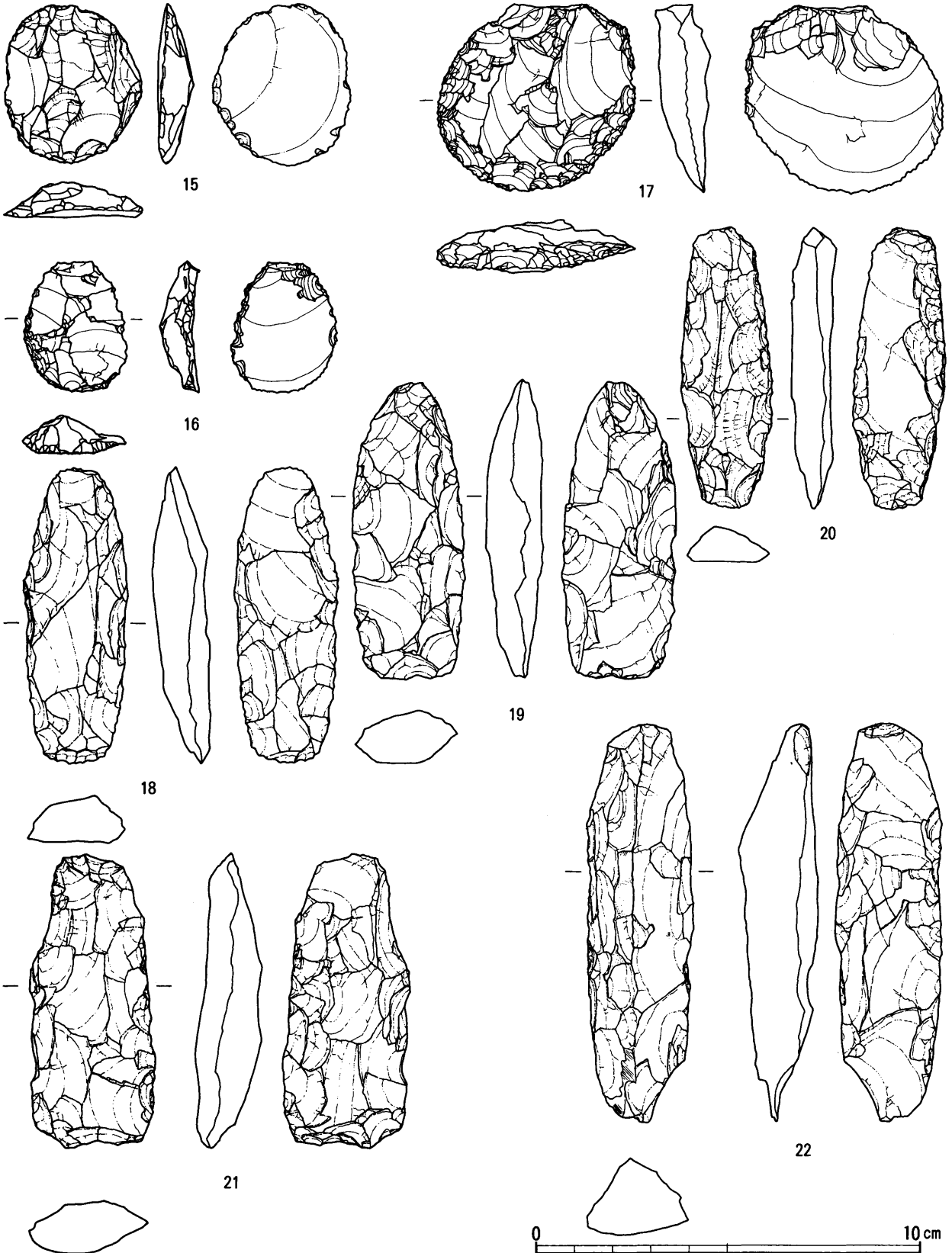
離面を大きく残す。

13・14は下部のみが残存する。14は未製品か。

C スクレイパー (15~17)

15はサヌカイト製、16・17はチャート製である。

15は、幅広の剥片の左右両端に刃部を形成している。刃部角はゆるい。16は、急角度の細かい調整が加えられている。拇指状の搔器である。17は、一部を除いてほぼ全周に細かい二次加工を施し、刃部と



第8図 石器実測図(2) (2:3)

している。

D 石斧 (18~22)

いずれも、ほぼ両面を加工する小型の片刃石斧である。緑灰色を呈する堆積岩製であり、いわゆる神子柴型に属する。

18~20は、よく似た形態を持つ。18は、一部に平滑な部分があるが、石材が荒いために、断定はできない。19の刃部付近裏面は、やや平滑な面となっている。

21はやや厚い断面形で、刃部を断ち切るような調整を行う。22は他に比して大型である。断面形は山形を呈し、稜上の一部と基端部に礫面を残す。刃部は欠損する。

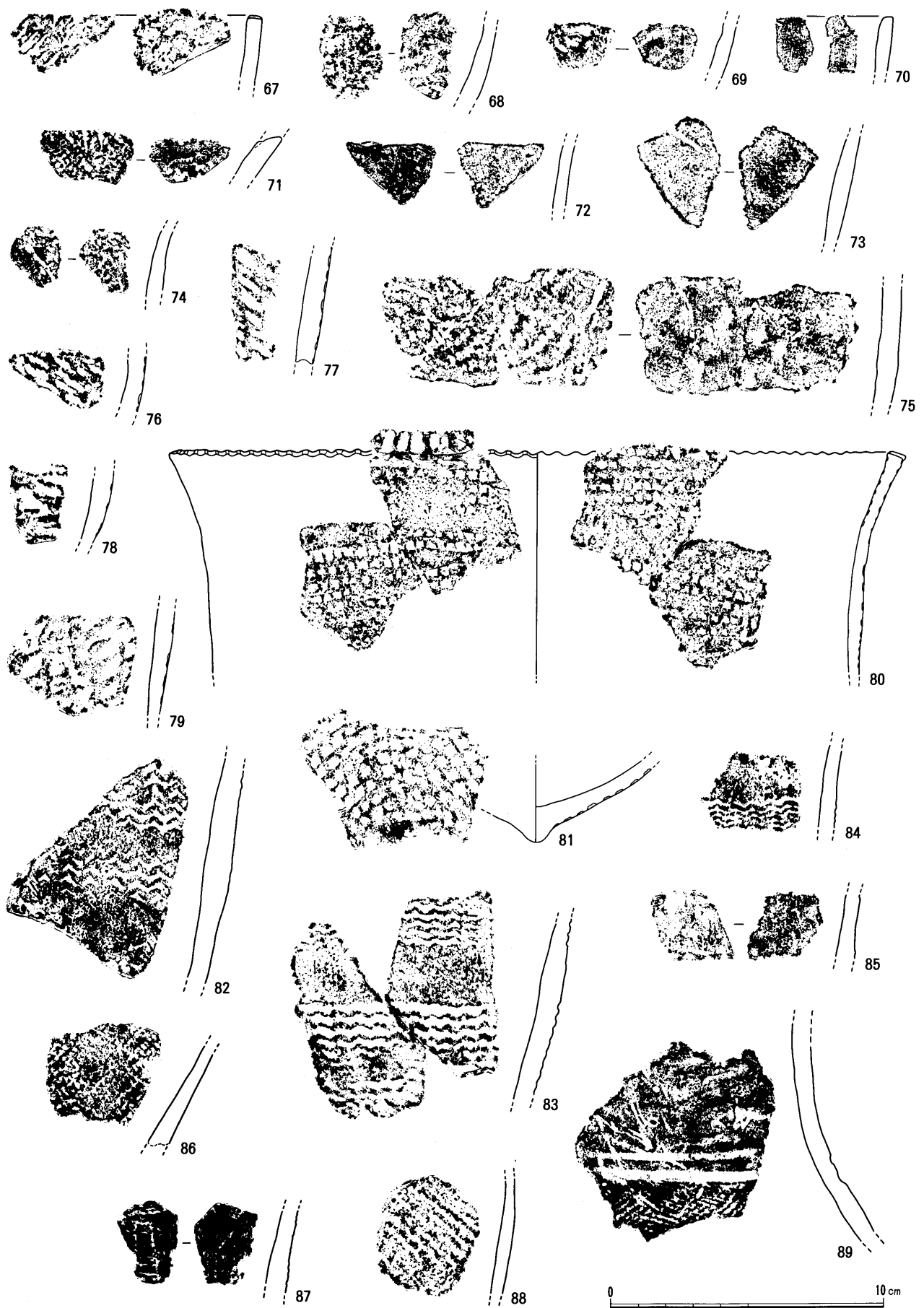
E 抉入削器 (23)

つまみ状の部分から大きく内湾し、表裏とも、図左の側縁部に、急角度の調整が施されている。図下部は、欠損しているものと思われる。

(松葉和也)

報告 No.	グリッド	整理 No.	層位	(cm) W→E	(cm) N→S	(m) 海拔高	器 種	石 材	(cm) 長	(cm) 幅	(cm) 厚	(g) 重	備 考
2 4	a6-2	50	I	170	6	37.68	石鏃	サヌカイト	2.1	1.8	0.3	0.75	
2 5	y6-2	81	III-2	103	93	36.83	石鏃	サヌカイト	1.7	1.7	0.3	0.65	上部欠損
2 6	z7-1	79	IV	126	120	37.17	石鏃	サヌカイト	2.1	1.3	0.2	0.54	欠損
2 7	y7-2	114	IV	187	123	36.63	有茎尖頭器	チャート	2.8	2.9	0.4	3.37	上部欠損
2 8	z7-1	195	IV	56	180	37.00	有茎尖頭器	チャート	3.2	4.1	0.6	8.76	上部欠損
2 9	y7-1	110	IV-2	81	57	36.44	有茎尖頭器	チャート	2.7	2.2	0.4	3.20	上部欠損
3 0	y6-1	21	IV	10	35	36.59	有茎尖頭器	チャート	3.3	4.0	0.6	8.64	上部欠損
3 1	x6-2	11	IV	58	187	36.46	尖頭器	チャート	5.6	3.5	0.7	14.77	上部欠損
3 2	x7-1	69	IV-2	124	70	36.30	尖頭器	チャート	4.7	1.7	0.6	4.37	上下部欠損
3 3	y6-1	22	IV-2	12	192	36.26	尖頭器	チャート	3.6	2.1	0.5	3.82	下部欠損
3 4	y6-2	45	IV	60	112	36.84	尖頭器	頁岩?	3.0	1.9	0.6	3.59	下部欠損
3 5	z5-2	33	IV	102	129	36.44	尖頭器	チャート	3.5	2.9	0.7	4.76	上部欠損
3 6	z7-2	46	IV	38	48	37.19	尖頭器	チャート	3.2	2.6	0.6	4.11	上部欠損
3 7	a5-1	5	IV	132	193	37.16	尖頭器?	サヌカイト	2.3	1.8	0.3	0.78	上下部欠損
3 8	a5-2	128	IV	70	158	36.76	尖頭器	チャート	3.0	1.9	0.5	2.49	下部欠損
3 9	a6-1	238	IV	30	20	36.95	尖頭器	チャート	3.2	2.1	0.6	3.69	上部欠損
4 0	a7-1	259	IV	171	96	37.14	尖頭器	チャート	3.1	3.2	0.5	5.10	上部欠損
4 1	b4-2	22	IV	169	19	36.93	尖頭器	チャート	4.4	3.4	1.1	13.39	上部欠損
4 2	b5-2	68	IV	55	87	37.11	尖頭器	チャート	5.0	2.7	1.1	13.95	
4 3	b6-1	59	IV	162	190	37.20	尖頭器	チャート	3.5	2.2	0.5	4.18	上下部欠損
4 4	a6-2	239	IV	128	15	36.94	尖頭器?	チャート	3.6	2.7	0.8	8.70	上部欠損
4 5	a7-2	153	IV	162	7	37.29	尖頭器	頁岩?	2.4	3.2	0.8	8.48	上下部欠損
4 6	a8-1	—	—	—	—	—	尖頭器	チャート	3.8	2.0	0.7	6.69	上下部欠損 旧河道内
4 7	a7-2	80	IV	124	80	37.33	尖頭器	チャート?	4.4	2.9	0.7	9.76	上部欠損
4 8	x6-1	1	IV	4	161	36.16	スクレイパー	サヌカイト?	2.8	2.2	0.6	3.57	欠損
4 9	x7-1	40	IV	57	3	36.35	スクレイパー	チャート	3.5	3.7	1.6	27.16	
5 0	y6-1	7	III-2	69	92	36.73	スクレイパー	チャート	3.9	4.5	1.2	24.48	
5 1	y6-2	58	IV	19	143	36.59	スクレイパー	チャート	4.4	3.7	1.8	21.85	
5 2	z7-2	37	IV	80	72	37.33	スクレイパー	チャート	3.4	2.9	1.0	7.75	
5 3	z6-1	102	IV	188	75	36.78	スクレイパー	チャート	2.9	3.3	1.4	13.13	
5 4	z6-1	124	IV-2	113	141	36.53	スクレイパー	チャート	3.6	3.4	1.4	16.52	
5 5	z6-2	118	IV	60	135	36.76	スクレイパー	チャート	1.9	3.3	0.9	6.56	欠損
5 6	a6-1	59	IV	55	135	37.34	スクレイパー	チャート	3.4	3.8	1.8	25.10	
5 7	a6-2	295	IV	164	141	36.77	スクレイパー	チャート	3.5	3.4	1.8	7.40	欠損
5 8	a7	—	—	—	—	—	スクレイパー?	サヌカイト	3.2	2.9	1.7	21.75	石核?包含層
5 9	a7-2	67	IV	172	70	37.25	スクレイパー	チャート	4.3	3.1	1.6	18.22	
6 0	a7-2	124	IV	11	47	37.49	スクレイパー	チャート	3.2	2.8	1.0	9.70	
6 1	a10-1	—	—	—	—	—	スクレイパー	チャート	2.7	3.4	0.9	7.89	旧河道内
6 2	b5-2	78	IV	113	53	37.06	スクレイパー	チャート	5.5	4.0	2.5	56.27	
6 3	—	—	—	—	—	—	スクレイパー	サヌカイト	3.5	3.6	1.2	17.50	表採
6 4	a6-2	156	IV	46	38	37.27	削器	粘板岩	9.1	4.4	0.9	47.81	
6 5	y6-2	68	IV	54	68	36.47	石斧	緑色岩	5.5	2.4	1.0	19.12	欠損
6 6	b7-2	36	IV	122	120	37.17	石斧	緑色岩	5.1	1.8	1.4	17.40	欠損

第2表 石器一覧表



第9圖 縄文土器実測図・拓影 (1 : 2)

2 縄文時代の土器

IV層を中心に、縄文土器も少量だが出土した。これらは、草創期から早期を中心として、前期や中・後期のものも含まれる。この内の主要なものを、以下に紹介しておく。

A 草創期・早期

小片であり、類例を見ないために詳細は不明だが、草創期か早期に属すると思われる一群と、早期の押型文土器とがある。

草創期か早期に属すると思われる一群には、爪形文かと思われる例(67~69)や無文の例(70・72・73)、縄文施文の例(71・74・75)、捺糸文土器(87)、がある。全体に、内面には指圧調整を施す例が多い。71や75を除いて全体的に薄手で焼成は良好であるが、暗褐色系の色調を呈する。

爪形文かと思われる例の内、67は口縁部片である。^④直立する口縁部は8cm程の径であり、口唇にはヘラキザミを施す。外面には、斜位に施した爪形文らしいキザミが横帯を成す。施文具は、爪というよりも直線的な篋状具である。68と69は、67よりもやや太い爪形のキザミを持つ体下部片である。

無文例の内、70は口縁部の小片である。わずかに外傾する直口口縁と見られる。内外面に強いタテナデを施す。72や73は、70と同一個体の可能性もある体部片である。早期押型文土器の山形帯状施文例中に胎土や色調が類似するものがあるが、器厚は無文例の方が一段と薄い。

縄文施文例の内、71は外面のみに強い撚りの単節Lの斜縄文を縦位に施したらしい体下部片である。内斜する擬口縁を持つ。74は、外面全体と内面の上半部に単節Rらしい斜縄文を、内面は斜位らしく、外面は縦位らしく施した体上部片である。薄手で焼成も良好であり、多縄文の可能性はある。75は上述したどれとも異なってやや厚手であり、黄褐色系の色調を基調とする。図示した例は径17~18cm程の体下部片であるが、そのほかにも同一個体らしい破片が数点ある。いずれも単節Lの斜縄文を横位に施しており、条間がやや広い部分が目立つ。表裏縄文土器に伴う外面施文例かと思われる。

捺糸文施文例(87)は、非常に細い単節縄文を疎ら

に巻いた絡条体を横位施文したものである。上部には、軸棒からほつれた捺糸痕も見られる。早期押型文土器の山形帯状施文例中に、胎土や色調・器厚が類似するだけでなく、極細い捺糸文を持つかとも思われる例(85)もある。このため、所属期に関しては慎重にならざるを得ない。しかし、草創期末葉の可能性もあることを指摘しておきたい。

早期には、押型文土器と押型文・捺糸文併用例、縄文の縦位帯状施文例とがある。

押型文土器には、ネガティブな楕円文の例(76~79)と正格子文の例(80・81)、山形文の例(82~84)が確認された。

ネガ楕円の例は、いずれも縦位施文した体部片であり、神宮寺式に並行するものと思われる。

正格子文の80は、口径26cmの深鉢であり、口縁部がゆるく外反する。口唇部には円棒状具の側面を押圧しており、内外には正格子文を横位帯状施文したものである。押型文原体は、長さ2.8cm、径0.7cmと推定される。胎土は砂粒を多く含んでやや脆弱であり、黒褐色を呈する。81も正格子文だが80程脆弱ではなく、黄褐色を呈する底部片である。小さな乳頭状突起は良く発達するが、底部の立ち上がりはゆるい。81は大川式に属するものと考えられる。

山形文の例は、いずれも帯状に横位施文した、やや薄手のものである。82と83は、胎土に砂粒が目立ち、茶褐色を呈する点も共通する。一方、84は山形がさらに低くて細く、灰褐色で器壁は薄い。

85は、押型文と捺糸文を併用した可能性もある。破片の上下端に、山形押型文がわずかに残る。この2帯の横位施文間に、極細の捺糸文の可能性もある痕跡が縦走する。胎土や焼成は、無文例や捺糸文例、さらには山形文の82や83にやや類似する。

縄文の縦位帯状施文例(86)は、体下部片である。単節Rの縄文を、間隔を空けて縦位に施している。薄手で砂粒が多くて黒褐色を呈する点は、正格子押型文の80と共通する。

B 前期・後期

88は羽状縄文であり、北白川下層式に属する。89は、頸部に2条の篋描沈線、以下に細い羽状縄文を持つ。北白川上層式に属しよう。

(山田 猛)

3 弥生時代以降の遺物

A 弥生時代 (90~94)

92・93は、いずれも中期の第Ⅱ様式に属するものである。92は口縁部に面を持ち、口縁端部は下方に拡張している。93は頸部に縦方向のハケメの後、櫛描横線文を施す。この原体幅は1.4 cmで、条数は9本である。縦方向のハケメは4列認められる。

94は後期末のものと思われるが、古墳時代初頭という可能性もある。

B 古墳時代 (95~102)

98・99はS字状口縁台付甕。98はB類^⑨に該当すると思われる、99もB類かと思われるが、縦方向のハケメは弱い。

95~97は前~中期のものと思われる。

C 飛鳥~奈良時代 (103・104)

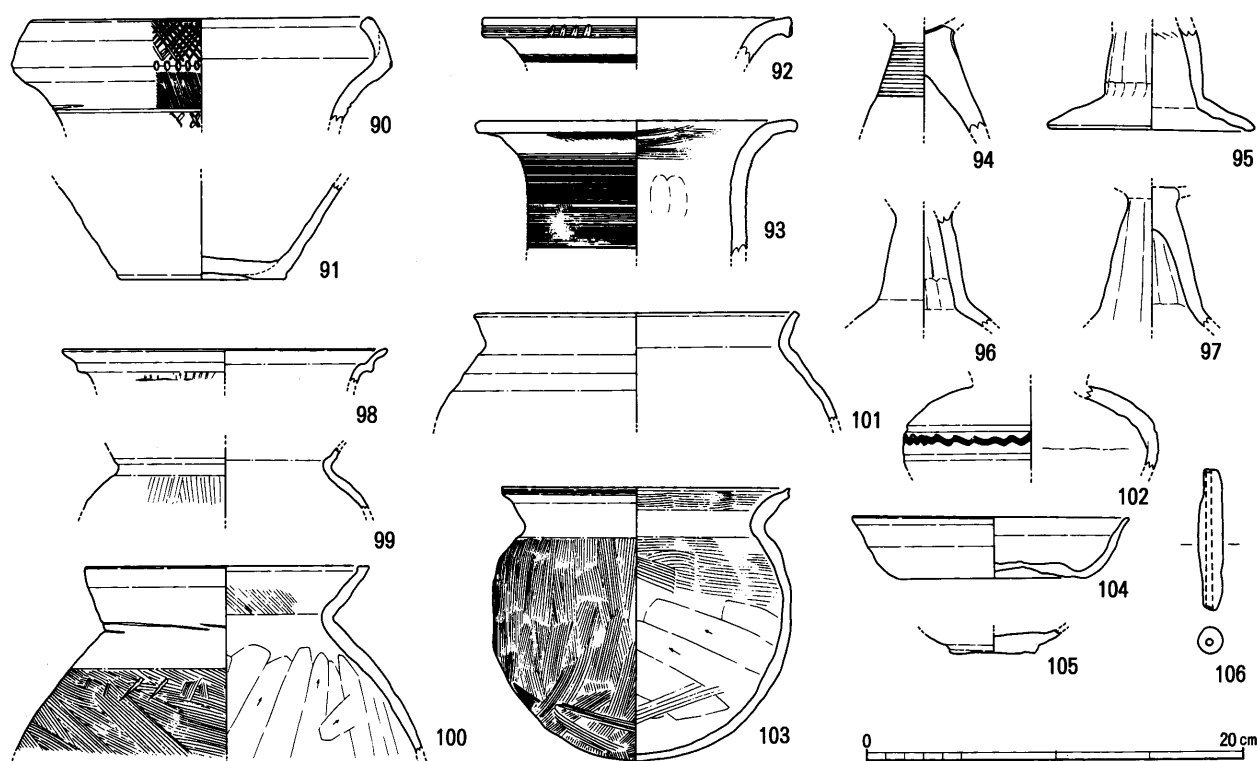
D 平安時代(105)

105は11世紀代のものであると思われる。

(松葉和也)

報告 番号	登録 番号	器 種	出土位置 遺 構	法 量 (cm)			形態・技法等の特徴	胎 土	色 調	残存度	備 考
				口 径	底 径	器 高					
90	004-01	弥生土器 細頸壺	旧河道	(17.6)	—	—	受口状口縁、口縁と頸部に斜格子文、口縁端部と下方にキザミ目	微砂粒を多く含む	5YR6/4にぶい橙	口縁部の一部残	91と同一個体?
91	001-01	弥生土器	a 5-1 Ⅲ層	—	8.8	—	ドーナツ状輪台部の上に粘土を充填	微砂粒を多く含む	5YR6/6橙	底部のみ残	90と同一個体? 一部被熱
92	004-02	弥生土器 甕	試掘坑 No137	(16.0)	—	—	口縁端部キザミ目、肩部に櫛描横線文	~3mmの石英粒を含む	10YR3/2黒褐	口縁部の一部残	
93	004-03	弥生土器 壺	試掘坑 No137	(16.3)	—	—	頸部縦方向のハケメ、櫛描横線文	3mmの砂粒を含みやや粗	7.5YR8/2灰白	口縁部の一部残	
94	005-01	弥生土器 高杯	旧河道	脚柱径 3.1	—	—	脚外面上部に櫛描横線文	微砂粒を若干含む	7.5YR7/6橙	脚柱のみ残	器面磨耗
95	005-02	土師器 高杯	溝	脚柱径 10.6	—	—	脚柱内側ヘラケズリ、絞り痕	微砂粒を若干含む	7.5YR8/3浅黄橙	脚部のみ残	
96	001-05	土師器 高杯	a 6-2 Ⅰ層	脚柱径 3.0	—	—	脚柱内側絞り痕	微砂粒を多く含む	外)7.5YR7/6橙 内)2.5Y6/3にぶい黄	脚柱のみ残	
97	001-06	土師器 高杯	旧河道	脚柱径 2.6	—	—	面取り削り、外面ヘラミガキ	微砂粒を若干含む	5YR7/6橙	脚柱のみ残	器面磨耗
98	002-02	土師器 甕	溝	(17.0)	—	—	S字状口縁	微砂粒を若干含む	2.5Y8/3淡黄 7.5YR7/6橙	口縁部の一部残	B類
99	001-02	土師器 甕	旧河道	—	—	—	S字状口縁、肩部縦方向のハケメ	密	10YR6/3にぶい黄橙	口縁部の一部残	B類?
100	003-02	土師器 甕	溝	14.9	—	—	口縁端部が内側に肥厚、口縁部コナデ、内面ヘラケズリ、外面横方向のハケメ	~3mmの砂粒を含みやや粗	5YR6/4にぶい橙	口縁部完存	肩部に櫛状工具による刺突文
101	002-01	土師器 甕	溝	(17.0)	—	—	口縁は「く」の字状、内面荒い板ナデ	微砂粒を若干含む	外)10YR7/6明黄褐 内)10YR4/3にぶい黄褐	口縁部の一部残	
102	001-03	須恵器 甕	旧河道	—	—	—	2本の浅い沈線間に櫛描波状文、淡緑色の自然釉がかかる	密	N7/0灰白	体部の一部のみ残	
103	003-04	土師器 甕	試掘坑 No132	(15.1)	—	14.5	外面ハケメ、内面横方向のハケメ、下半分はヘラケズリ	~2mmの砂粒を若干含むが密	10YR7/3にぶい黄橙	一部を除き残存	内面下部に炭化物痕、外面下部に煤
104	003-01	須恵器 杯	試掘坑 No129	14.7	9.8	3.4	ロクロナデ、底部外面巻き上げ痕、側面に工具のあたり痕	~4mmの砂粒を含みやや粗	N6/0灰	口縁部3/4残	
105	003-03	土師器 皿	旧河道	—	4.1	—	ロクロ成形	砂粒を若干含むが密	7.5YR7/4にぶい橙	底部のみ残	
106	001-04	土錘	b 4-2 トレンチ	最大径 1.4	長 7.6	重(g) 11.8		微砂粒を若干含む	10YR8/6黄橙	完形	

第3表 弥生時代以降の遺物観察表



第10図 弥生時代以降土器実測図（1：4）

V 結 語

高皿遺跡における今回の調査では、縄文時代草創期の石器群を中心に、草創期から後期の土器や弥生土器、古墳時代前期の溝や土器が検出された。

以下、縄文時代草創期から早期に関してのみ触れておく。

1 縄文時代草創期の石器

草創期に限らず、確認できた石器類は、石鏃5点、有茎尖頭器10点、木葉形尖頭器24点、スクレイパー類21点、石斧7点（以上第1表・第2表参照）、その他2,900点であり、合計2,967点に及ぶ。石材は、近くの櫛田川で採集できるチャートが圧倒的に多く、石斧には緑色片岩が限定的に使用される。その他には、微量の頁岩やサヌカイト・黒曜石等もある。

器種構成は、茎部の発達した有茎尖頭器、円形搔器、拇指状搔器、神子柴型石斧等の縄文時代草創期に特有なものが主体をなす。なお、石鏃は5点の内でも草創期らしい例が1点のみと少ない。以上のことから、これらの石器群は、縄文時代草創期前半に

属するほぼ純粋な一括資料と推定される。しかし、伴出した神子柴型石斧は全長10cm以下のものが大半を占めており、10cmを越す例も幅狭い。これらは、後出的な様相と考えられる。⁹⁾

一方、縄文時代の遺物は全て二次堆積した包含層から出土した。草創期の隆起線文土器は出土せず、爪形文や多縄文等の可能性がある小片が少量認められた。したがって、当石器群は爪形文土器等に伴う可能性も否定できない。しかし、石器の様相からは、爪形文土器期にまで下げる積極的な根拠もない。したがって、今回の調査では当石器群には土器は伴出しなかった、と理解しておきたい。おそらく、隆起線文土器の新しい部分が伴ったのであろう。⁹⁾

2 縄文時代草創期の高皿遺跡

縄文時代草創期の遺物は、最下層のIV層を中心に各層から出土した。しかし、同層からは縄文時代後期までの土器も出土しており、時代毎に分層できるものではないことが明らかになった。

一方、遺構は認められなかったにもかかわらず、石器類は剝片まで含めると 2,967点に及んだ。また、調査区は低い台地の縁辺部であり、地山は北東方向に傾斜している。したがって、石器を包含した層は二次堆積層と判断された。そして、石器には製品は少なく、製作途中の失敗品や未製品及び剝片が多い。おそらく、調査区に隣接する南西の台地上に石器製作跡があったのであろう。接合資料の確認は今後の課題としたい。土器が伴出しなかったことも、今回の調査区は居住地点ではなくて石器製作地点に隣接していたことに因るかと思われる。

なお、当遺跡の東方1 km程にある牟山遺跡^⑩でも同じような器種構成の石器群が大量の剝片と共に出土しており、大いに注目される。

[註]

① 『宮川流域の自然と文化』（建設省三重工事事務所、1988年）。

② 竹内理三『平安遺文』古文書編1（東京堂出版、1974年）。

③ 多気町指定史跡（平成元年12月指定）。

下村登良男「四疋田銅鐸の問題」（『多気町史』通史 第二編 原始 第四章第四節、多気町史編纂委員会、1992年）。

④ 奥 義次「縄文時代」（『多気町史』通史 第二編 原始 第二章、多気町史編纂委員会、1992年）。

⑤ 注④に同じ。

⑥ 『松阪市史』第二巻 史料篇 考古（松阪市史編さん委員会、1978年）。

『第12回三重県埋蔵文化財展 三重の縄文時代』（三重県埋蔵文化財センター、1992年）。

⑦ 田村陽一他「上ノ広遺跡」〔『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊1、三重県教育委員会、1989年〕。

⑧ 注⑥に同じ。

⑨ 田村陽一氏のご教示による。

3 縄文時代草創期・早期の土器

爪形文や無文・多縄文・表裏縄文系・捺糸文施文と見られる土器が出土した。しかし、小片が少量あるのみで詳細は不明である。また、薄手で焼成も良いが暗褐色系の色調である。近畿・東海地方に類例が認められない現状では、その位置付けは断定できないが、当地方における草創期後半期を考える上で貴重な資料である。

また、早期押型文の山形文や縄文の帯状施文例も、近畿・東海地方と中部山岳地帯等との文化動態を知る上で貴重な資料である。

（松葉和也・山田 猛）

⑩ 注④・⑥・⑦に同じ。

⑪ C地区は旧河道以外の遺構が検出されず、遺物の出土もなかったため、概報という性格上割愛した。

⑫ 酒井幸則「増野川子石遺跡」〔『長野県史』考古資料編全1巻（3）主要遺跡（中・南信）、長野県史刊行会、1983年〕の第2図の1に類似例がある。

⑬ 山田 猛他「山城遺跡・北瀬古遺跡」（『一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査報告』第3分冊1、三重県教育委員会、1994年）。

⑭ 栗島義明「有茎尖頭器の型式変遷とその伝播」（『駿台史學』第62号、駿台史学会、1984年）。

藤沢宗平・林 茂樹「神子柴遺跡—第一次発掘調査概報—」（『古代学』9-3、1961年）。

森島 稔「神子柴型石斧をめぐっての再論」（『信濃』第22巻第10号、信濃史学会、1970年）。

⑮ 吉田英敏他「寺田遺跡」（『寺田・日野1』、岐阜市教育委員会、1987年）。

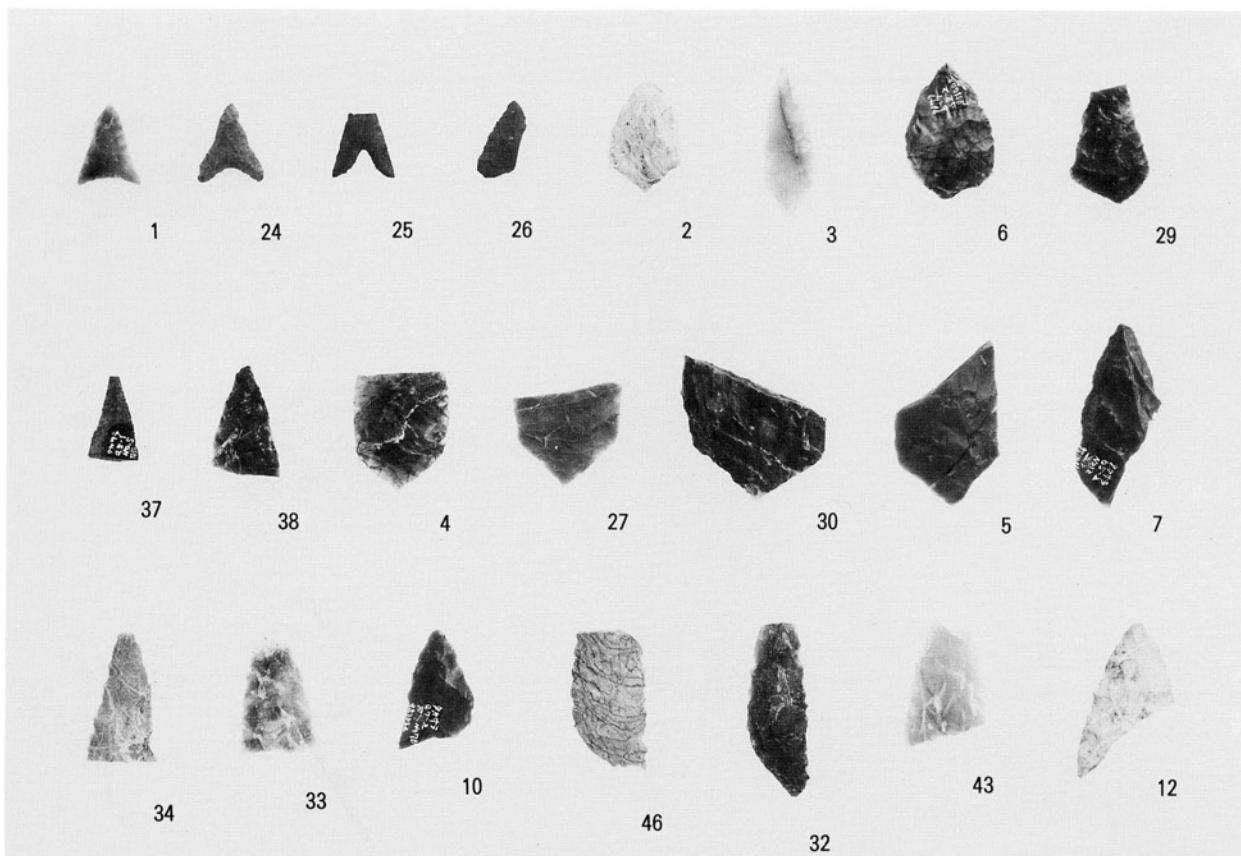
⑯ 注④に同じ。



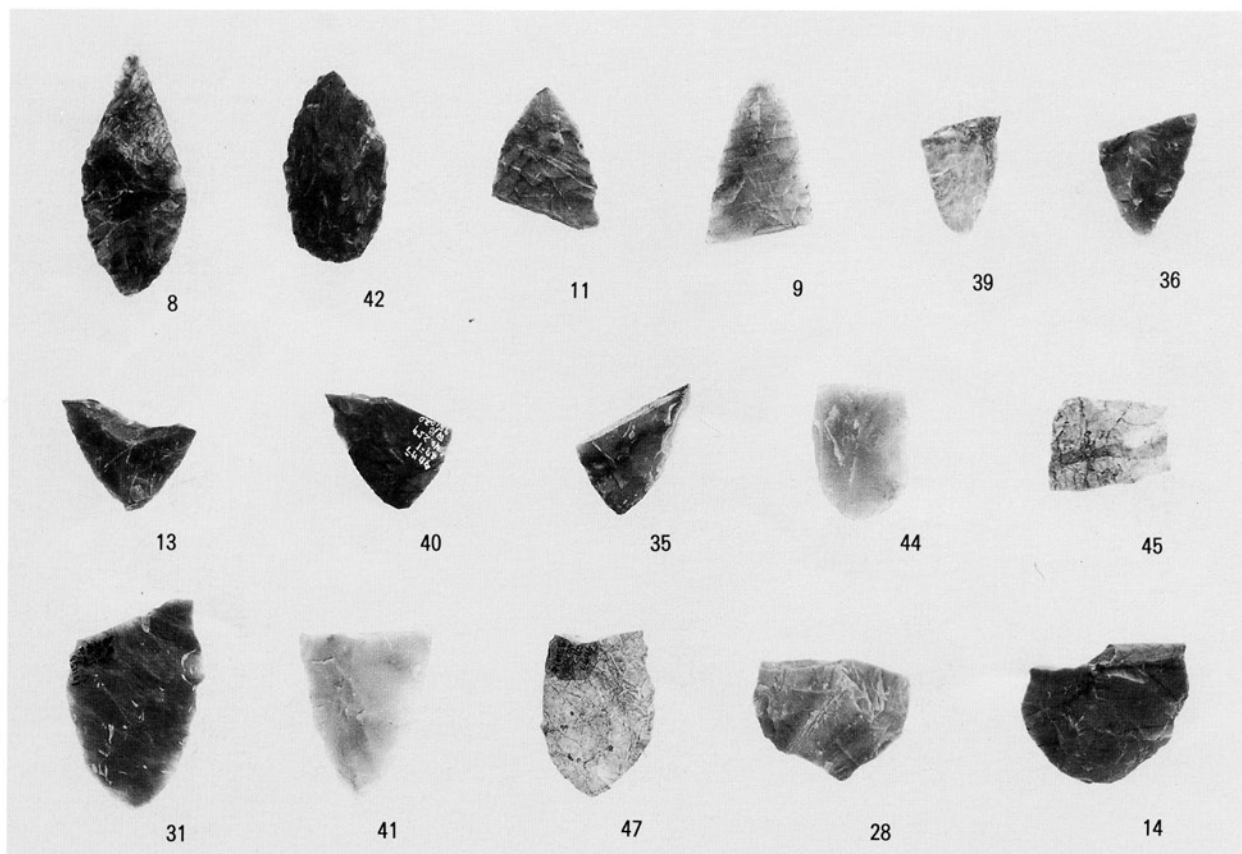
遺跡付近航空写真（南西から）



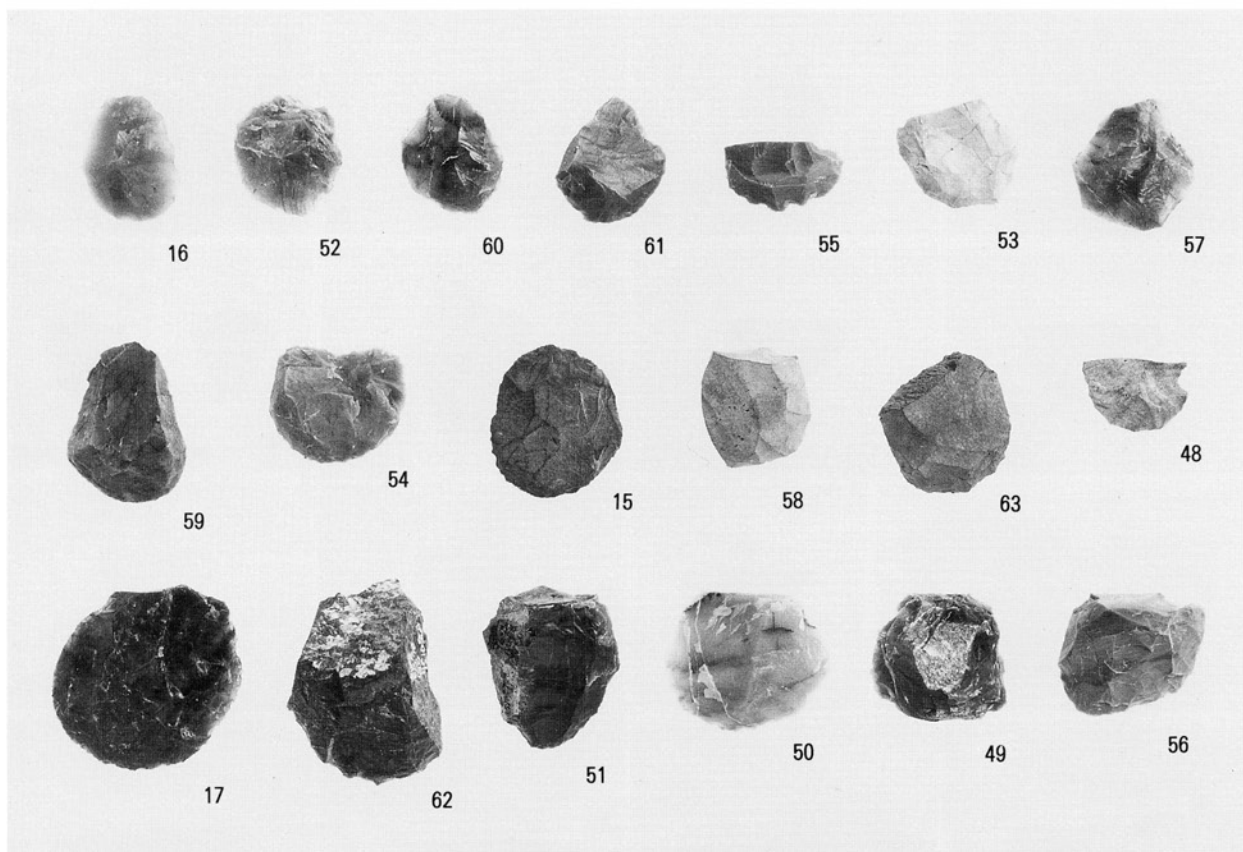
A地区調査風景（南から）



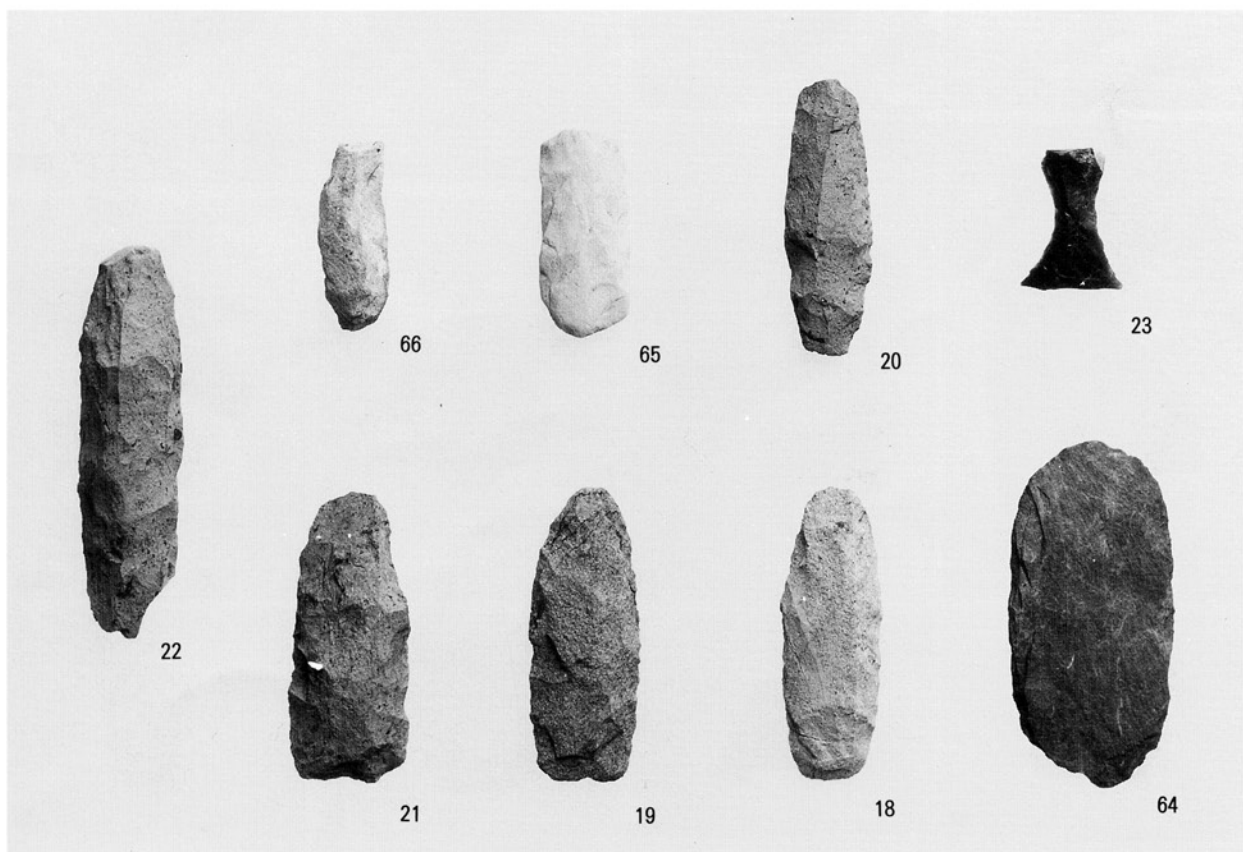
石器写真(1) 石鏃・有茎尖頭器・木葉形尖頭器 (1 : 2)



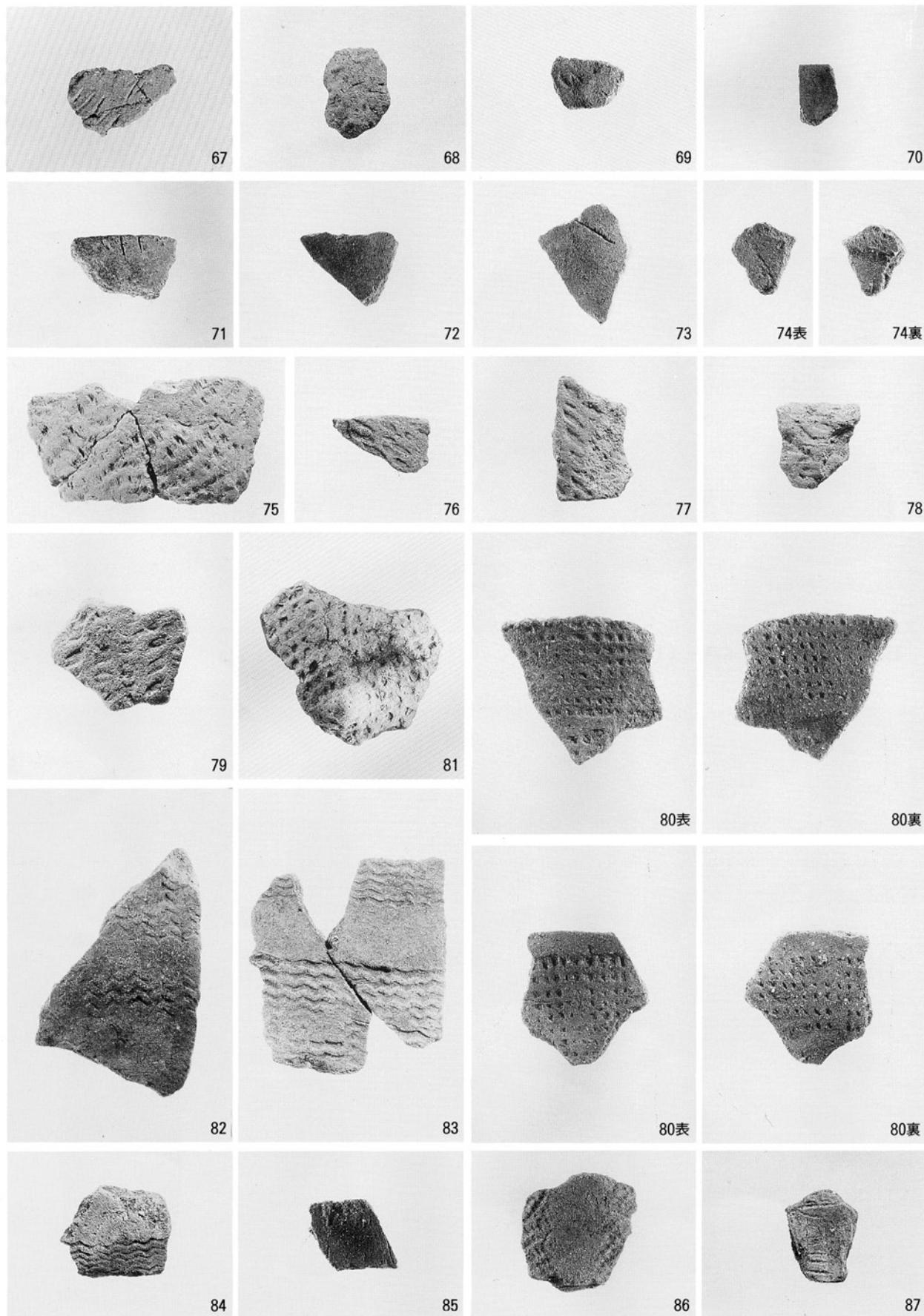
石器写真(2) 木葉形尖頭器 (1 : 2)



石器写真(3) スクレイパー (1:2)



石器写真(4) 石斧・削器 (1:2)



縄文土器写真（1：2）

報告書抄録

ふりがな	たかざらいせき はくつちようさがいほう							
書名	高皿遺跡発掘調査概報							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	133-4							
編著者名	松葉和也・山田 猛							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-03 三重県多気郡明和町竹川503番地 TEL 05965-2-1732							
発行年月日	西暦 1996年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たかざらいせき 高皿遺跡	みえけんたきぐん 三重県多気郡 たきちようしひきだ 多気町四疋田 あぎたかざらいけのした 字高皿・池ノ下	24441	429	34° 29' 30"	136° 32' 3"	19951002~ 19951107	560	平成7年度県 営ほ場整備事 業(四疋田地 区)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺跡		特記事項		
高皿遺跡	製作跡	縄文時代 草創期	溝 一条	石器(石鏃、尖頭器、 スクレイパー、石斧、 剝片) 縄文土器 土師器		縄文時代草創期の石器 群が出土		

平成 8(1996) 年 3 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 6 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 133-4

高 皿 遺 跡 発 掘 調 査 概 報

1996年 3 月

編 集 三重県埋蔵文化財センター
発 行

印 刷 光 出 版 印 刷 株 式 会 社
